

# 声とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

平成16年度は、7月に第1回の研究会を開催した。木村豊氏の発表は、文字媒体により、音声メディアの擬装をする工夫を19世紀前半の絵入り雑誌の表現の中に見る試みを呈示し、参加メンバーの活発な議論を惹起し、プロジェクトテーマを掘り下げることができた。またいっぽう、紀要論文関係で、佐々木氏の論文「エクリチュールと<声>」は、小林秀雄の文章を例に分析することで、エクリチュールの中におけるロゴスの生成を指摘している。学部の紀要「人文科学研究」において、はじめて特集号を組み、連携して研究テーマを追究し、研究成果を鋭意公表した。村上論文「デカルトの身体論」は、テキストにおける身体、身体性を根源的に捉え直し、鈴木論文は『平家物語』（書物 伝本の相における）の「朗詠」の取り入れ方を調査検討し、音楽（一声）がテキストの形にいかに関わり、いかにテキスト化されたかを実証的に示し、声の文化を浮き彫りにし、高木論文は、大都市パリを語る<声>の生成がいかに詩法に影響を与えたかを考察した。<身体>をキーワードにしながら、<声>とテキストとの深い関わりをそれぞれの視点で追究した。

また科学研究費を申請・採択に積極的に活動し、このプロジェクトテーマに直接・間接に関わり合いながら、着々と具体的な成果を挙げている。

## (1) 研究会

第1回 平成16年7月30日 7時－7時

於 学際交流室

発表者 木村 豊

題 目 音声メディアとして見るドイツ初の『飛ぶ瓦版』

## (2) 論文

プロジェクト特集「声とテキスト論」

村上 吉男 「デカルト身体論」 pp. Y 5-29

鈴木 孝庸 「平家物語における郢曲とそのテキスト」 pp.T5-47

高木 裕 「ボードレールの「七人の老人」について

— 詩の主体に関する一試論 —」 pp.T31-56

以上、「人文科学研究」第116輯 平成17年3月

佐々木 充 「エクリチュールと<声>」,「表現文化研究」第1号,平成17年  
3月 pp.29-64